

武尊通信

ほたかつうしん
第183号

群馬歴史民俗研究会

〒372-0033
群馬県伊勢崎市
南千木町 5226-12
gunrekimin@gmail.com

(振替00340-1-14572)

2025.9.1 発行

山名氏と矢田氏

久保田順一

鎌倉期の山名氏に関する史料は『吾妻鏡』以外にはほとんどない。従って、その動向は後世に成立した記録・系譜に頼って検証することになるが、それには様々な問題がある。『尊卑分脈』（以下、『尊卑』とする）などから問題点を探ってみよう。

『尊卑』によると、義範は義重の長子としてみえ、「号山名三郎 伊豆守 右馬助 従五位下 新田太郎三郎」、その子義範は「新田太郎、早世」とある。義範の仮名が三郎・太郎三郎、その子義範が太郎であるのは奇異で、義範について疑問がある。これに関し、佐々木紀一が秋田藩家蔵「北酒出本源氏系図」を用いて検討している。同系図によると、義範は義重の三子で、その子に義範はみえず、義範から直接重家・重国に続く。一方義重の長子に義時がみえ、「山名太郎」とあ

る。佐々木は『尊卑』が義時を義範と読み替えて、さらに義範の嫡子に誤入されたと推測している。これによって、義重に夭折した長子があり、義範は三男であったことが想定される。

次に、『難太平記』によると、山名嫡流の時氏が「我、建武以来は当御代の御かげにて人となりぬれば、元弘以往はただ民百姓のごとくにて上野の山名という所より出待ちしかば、渡世のかなしさも身の程も知も知にき」と語ったとされる。このように語った背景に何があるのか、検討してみよう。

『尊卑』には重家・重国兄弟に加え重国の子重村らが「承明門院藏人」とみえる。義範の後、山名一族は京都に活動の舞台を移し、後鳥羽の妃承明門院在子に仕えたことがうかがえる。重国に「承久合戦分捕了 廿四歳」と注記がある。二十四歳で同乱に出陣し、討ち死にを遂げたことを示す。「承明門院藏人」の記事が事実であれば、重国らは後鳥羽方についたとみるのが自然で、その結果として討ち取られたのであろう。子細は不詳である

《第二三〇回 例会のお知らせ》

対面及びオンライン (Zoom) で開催します。

日時 二〇二五年九月二十八日 (日)

午後二時～五時

会場 前橋市中央公民館五〇六学習室

(前橋プラザ元氣21 五階)

報告 鈴木 愛琉氏

「群馬の義民伝承について」

廣瀬 亮輔氏

「那波氏の系図と大江氏婿入伝承の検証」

申込 会場・オンライン視聴いずれの場合も参加申込が必要です。参加希望者は、申込フォーム (左記URL、二次元

コード、本会HP) に接続し申し込みを行うか、TELまたはFAXでご連絡ください。

URL : <https://forms.gle/ZbUQNWSE1Daxnq4n6>
TEL/FAX : 0270 (32) 9070



が、「分捕了」の前に「被」が落ちたのではないだろうか。また、「廿四歳」も不審である。子の重村も「承明門院藏人」とあるので、その父の重国が二十四歳で討ち取られたとは考えられない。ここにも錯誤・誤入があったと思われる。正しくは、山名一族は承久の乱において後鳥羽側につき、出陣した重